

〈その刻〉のエレクトラ

— ソポクレス『エレクトラ』1415-16 —

平 野 陽 一

ああっ、刺された。

刺すのです、できることならなお一突き。

ああっ、二度までも。

アイギストスと一緒にならば良かったのにねえ。⁽¹⁾

ὦμοι πέπληγμαι.

παῖσον, εἰ σθένεις, διπλῆν.

ὦμοι μάλ' αὖθις.

εἰ γὰρ Αἰγίσθω θ' ὁμοῦ.

El. 1415-16

I

謀殺されたミュケナイ王アガメムノンの遺児オレステスは、亡き父王の仇敵を討つため亡命先から帰国し、その昔アイギストスと謀って父を殺した実母クリュタイムネストラに復讐の刃を突き立てる。父の仇敵討ちを長い間待ち望んでいた姉のエレクトラは、命乞いする母の絶叫には耳も貸さずに、さらにとどめを刺すように冷たく言い放つ……。

ソポクレスの『エレクトラ』は、これと同じくエレクトラとオレステス姉弟による復讐譚が題材として扱われているアイスキュロスの『^コ供^エ養^ボする女^ロたち^イ』やエウリピデスの同名の悲劇『エレクトラ』とはかなり印象を異にするが、上に引用した箇所、すなわち城内に討ち入る弟らを見送って舞台上にただ一人残るエレクトラが、城館のなかから聞こえてくる母の絶叫に答えて罵る台詞は、それを最もよく表わしている場面の一つといえるだろう。母親殺しにいささかの苦悩、躊躇いも見せず、母の最後の声を聞いて平然と答えるエレクトラの台詞は実に冷酷であり、また復讐を遂げてその旨を報告するオレステスの「もうこれ以上あの傲慢な母親に侮辱され

る恐れはない」(1427) という言葉にも、母親を手にかけてことへの良心の呵責は微塵も感じられない。そしてそれが、例えばエウリピデスの、母を殺して父の復讐をするように求めたアポロンの神託がどうしても善いもの、正義になかったものとは信じられず、このような神託を下した神が実は悪魔なのではないかと疑問を投げかけるオレステス⁽²⁾や、母を殺害した後で「恐ろしいことをした」と心情を吐露し母の遺骸に衣服を優しく覆いかけてあげるエレクトラ⁽³⁾とは際だった対照を見せていることも周知の事実である。

作品間のこのような雰囲気の違いについては、ソポクレスの手になる『エレクトラ』の描き出しているものが、身内に被った分だけ相手に仕返すといういわゆる〈血の復讐〉の正義と実母を殺すことによる罪や穢れの意識との間で煩悶・苦悩するオレステスやエレクトラの姿にあるのではなく、むしろエレクトラ個人の心の内における葛藤——仇敵を討ち亡き父の恨みを晴らしたいという強い願いと、それを胸内に思い抱くばかりで現実には実行できない今の境遇との葛藤——であると説明されるのがふつうである⁽⁴⁾。

確かに、プロロゴス途中(85)でエレクトラの登場を前に舞台から退いたオレステスは第三エペイソディオン冒頭(1098)まで姿を見せず、その間終始舞台上にあるのはエレクトラであり、彼女がクリュタイムネストラや妹のクリュソテミスらとのやりとりを通じて劇を進行する中心的役割を果たしている。そして、父を愛するがあまりその仇敵討ちを悲願とする彼女が、誰ひとり同調する者もない孤独のうちに、唯一希望を託した弟の死の報告を受けて絶望の底へと突き落とされ、さらにそれが復讐のために仕組まれた策略であったことを弟自身の口から知らされると今度は歓喜の絶頂に駆け上るというように、希望から絶望へ、悲嘆から歓喜へと様々に打ち寄せる感情の激しい波に翻弄され、その葛藤のなかで彼女のいわゆる「心の悲劇」が形成されているというわけである。

けれども、姉弟が再会を果たし二人が一致協力して復讐を果たすに至る経緯と、その間のエレクトラの絶望と希望の波間に揺れる感情の起伏により一層重点が置かれ、そしてそれらの主題が第三エペイソディオンにおいて完結しているとするならば、これに続く復讐実行の場であるエクソドスは、逆に何か取って付けたような、言い換えれば、残された仕事を単に片づけるだけの事務処理的な印象を我々に抱かせることも事実である。とりわけ先に挙げたエレクトラの台詞(1415-16)は、その直前でのオレステスとの再会が彼女に歓喜の絶頂をもたらし舞台全体が幸福感に包まれるだけにかえて陰惨で殺伐とした印象が強く、さらには、ソポクレスにとってはもともと主題から外れ避けて通りたかったと思われる懸案の問題——母殺しの罪と復讐の責務との間に必然的に生起する正義問題——をあらためて蒸し返すこ

ともなりかねないのである。

では、オレステスによる母殺しの成就を、例えば一例として、従者による報告でさり気なく済ませて後半のアイギストスに対する復讐の場以降に結びつけることはせずに、なぜソポクレスはわざわざエレクトラにそのような冷酷な言葉を吐かせる場面を設定したのだろうか。小論では、以上の視点のもとに、エクソドス1415-16の復讐の場面を取り上げ、エレクトラ悲劇全体の構造からこの箇所より積極的な意味を検証してみたい。

II

先に述べたように、ソポクレスは復讐の意志決定に至る過程で生じる苦悩・葛藤も、また復讐実行後の後悔もこの悲劇の中心主題として取り上げてはいない。換言すれば、父の恨みを仇敵の血で贖う「まさに今、この刻」に視点と劇要素を凝縮させることによって、復讐の「以前」や「以降」に発生する諸事情を意図的にこの悲劇の埒外に置いているのである。このような詩人の創作態度は、『エレクトラ』の劇構造の特徴のひとつとして、まずプロロゴス冒頭、オレステス(Or.)と守役(Pa.)との間で交わされる会話に鮮明に反映されている。

Pa. さあ、館から人が出てこないうちに

手筈を整えておかなければなりません。もはや今は躊躇する
カイロス 刻 アクトメー ではなく、むしろ仕事を果たす潮時なのです。(20-22)

その昔、幼少のオレステスを城中から救い出し、成人した今日まで扶育係として付き従っている年老いた守役は、すぐにでも仇敵討ちの打ち合わせをするようにオレステスを促すが、オレステスの方もこれに答えて、彼に全幅の信頼を寄せていることを戦場で主人に従う勇敢な愛馬に喩えて告げ、討ち入りに備えて城内の事情を探ってくるように命じる。

Or. そこで私も考えていることをはっきりうち明けるから、

お前は私の言うことをしっかりと聞いて、

もし私がカイロス時機を捉えていなければ、その誤りを正してくれ。

私が父を殺した者どもに報復の裁きをつけてやるためには

いったいどのようにしたらよいか何うために

以前ピュティアの神託所を訪ねたとき、

ポイボス神は私にこのようなお告げを下されたのだ、
武具を着けず、軍勢を率いることもせず、ただ私自身の手で
密かな策略を巡らせて正義の仇敵討ちをやり遂げよ、と。
我々はこのような託宣を耳にしたのだから、好機^{カイロス}がお前を導くときには
いつなりと館のなかへ入っていき、
そこで行われることは何でも見ておくのだ、
見聞きした後で、それを詳しく我々に報告するためにな。(29-41)

さらに、オレステスが不慮の事故で死んだとの偽りの報らせを伝えて仇敵たちを油断させるように指示した後で、次のように締めくくる。

Or. 今はそれだけを言っておこう。さて爺、お前は
さっそく出掛けて行って、自分の務めを果たすように心を配るのだ。
我々二人もこれから行くでしょう。今こそ好機^{カイロス}、人間にとって
あらゆる仕事の最大の主君たるその好機^{カイロス}だからだ。(73-6)

すでに遠矢射る予言の神ポイボス・アポロンは復讐の「刻」^{とき}〈καιρός〉へと神託の言葉を射放っている。仇敵討ちはアポロンの後ろ盾を得たものとして正義にかなっていることは疑い得ない。そして「もはや今は躊躇する刻ではなく、むしろ仕事を果たす潮時^{アクメー}なの」(ὥς ἐνταῦθ' ἐμὲν ἔν' οὐκέτ' ὀκνεῖν καιρός, ἀλλ' ἔργων ἀκμή) であり、その時機を正しく捉えてこそ、アポロンが授けた神託を成就することができる。為すべき仕事——復讐——が首尾良く成功するか否かを左右するのは「人間にとってあらゆる仕事の最大の主君」(ἀνδράσιν μέγιστος ἔργου παντός ἐστ' ἐπιστάτης) である「好機^{カイロス}」だというのである。

『エレクトラ』は、こうして仇敵討ちがいよいよ目前に迫っていることをオレステスと守役とが互いに確認し合う場面で幕を開けるが、我々がとりわけ注意を惹かれるのは、わずかに六十行に満たない上述の箇所(20-76)に四度(22, 31, 39, 75)も繰り返して〈καιρός〉用語が用いられ、事態の緊迫感が強調されていることである。今は躊躇っている場合ではなく「仕事の潮時⁽⁵⁾」(ἔργων ἀκμή) だと忠告する守役の言葉は、復讐に対するオレステスの意識をあらためて呼び覚まし、これに応じるオレステスの言葉によって、我々観衆もまた劇の冒頭からいきなり仇敵討ちが実行される現場へと投じられ、アポロンの神託が的に命中して現実化する場面の目撃者とされるのである。

ところで、この〈καιρός〉という用語は、我々がすでに前作『オイディプス王』

で確認したように⁽⁶⁾、オイディプス悲劇の中核を為す重要な概念であった。すなわち、

① 終末を寸刻先に控えて緊迫感に溢れた「危機」

としてオイディプス悲劇の構造全体をその内部から支えつつ、また一方で

② 行為の善悪を決定する実践行為における倫理的価値判断の規範

として、この用語はオイディプス自身の知的、倫理的盲目性に深く関与していたのである。人間の行為はアプリアリにその善悪は決定され得ず、〈καιρός〉に合致したものであるとき善であり正義であると評価され、合致しなければ悪であり不正であると見なされる。しかし『エレクトラ』における〈καιρός〉の意味内容は、このような伝統的な〈καιρός〉観⁽⁷⁾を提示する『オイディプス王』のそれとは多少異なり倫理的価値としての側面は薄く、目論んだ計画が首尾良く成就するか否かという功利主義的尺度として理解されている。「あらゆる仕事の最大の主君」という言葉にも看取できるように、〈καιρός〉は復讐計画の実現を図る上で、事の成否を握る強力な力となる。そして、〈καιρός〉の提示とともに舞台上に現れ、それを何度も口に出すオレステスは、それ故、この力を象徴する存在として具現化されているわけである。言い換えれば、エレクトラにとってオレステスの到来は、まさしく「復讐の刻」そのものの到来に他ならない。そしてオレステスはアポロンが定めた〈καιρός〉へと真っ直ぐに突き進み、母殺しを疑うことなく「仕事」として淡々と手がけるのである。

オレステスの登場と〈καιρός〉の提示によって始まった舞台は、彼が再登場しエレクトラと再会を果たす場面でこの用語がまた多用されると、討ち入りを控えてさらに緊迫の度を深める。姉弟の思いがけない再会に浮かれ騒ぐエレクトラの不用意な発言を抑えて、彼は「その刻が来ぬうちは、長々と喋りたがってはいけない」(οὐ μὴ' στί καιρός μὴ μακρὰν βούλον λέγειν) (1259)、「長話は時間の好機を逃す」(χρόνον γὰρ ἂν σοι καιρὸν ἐξείργου λόγος) (1292) と復讐が目前に迫っていることを告げ、また守役も両者の長話を制して「さあ、けりをつける潮時だ」(ἀπηλλάχθαι δ' ἀκμή) (1338)、「今こそ仕事を為すべき刻だ」(νῦν καιρός ἔρδειν) (1358) と決行を促し、エクソドスの討ち入りの場を迎えるのである。このように、プロロゴス冒頭部 (20-76=κ. A 部分) に対応する形で、それと対蹠的な位置——第三エペイソディオン後半 (=κ. B 部分) で再びこの〈καιρός〉用語が集中的に使用され、この両部分が『エレクトラ』の筋立ての外郭を構成していることを我々は指摘することができる⁽⁸⁾。そしてこの [κ. A 部分] と [κ. B 部分] の中間——第一、第二エペイソディオン——に差し挟まれるようにして、先にも述べたように、エレクトラの「心の悲劇」が絶望と歓喜の波動とともに展開されるわけである。

III

では、エレクトラにとって〈*καιρός*〉は具体的にどのような意味を持ち、それが復讐の場における彼女の発言（1415-16）とどのような関わりを持つのだろうか。オレステスと同様に、彼女にとっても〈*καιρός*〉が第一に「復讐の刻」を意味することは論を俟たない。しかし、幼少時に城外に救われた弟とは異なり、アイギストスやクリュタイムネストラの厳しい監視下で鬱々とした毎日を過ごすエレクトラにとって、〈*καιρός*〉の意味はより感情的な背景を有するように思われる。

オレステスと守役が退場した後を受けてエレクトラと合唱隊が歌い交わす哀歌形式のパロドス（121-250）では、彼女は今なお父の死を悼み、日頃の憂いや憤りも交えて嘆き悲しむが、その言葉がさらなる不幸を招くのではないかと気遣うミュケナイ市民の婦人たち（＝合唱隊）は、殺害者たちに対する非難の言葉をあからさまに口外するエレクトラに、「気をつけて、もうそれ以上は語らぬように」（213）と忠告する。これに答えてエレクトラはどのような災過が身に及ぼうと嘆くことは我慢しないと言い、次のように続ける。

El. だってねえ、皆さん方、いったいどなたに

適切^カと思える言葉^イを、私は聞かせて頂けましょ^リうか、

時宜^アにかなったことを心得ているようなどなたに。（226-8）

なかなか自分の前に現れない弟を待ち侘びる気持ちはつのるばかりだが、その願いもかなえられることなく毎日が虚しく過ぎ去っていく。オレステスが来ないとするならば、では誰に自分の思いを聞いてもらえるのだろうか……。ここに語られる「時宜にかなったこと」〈*καίρια*〉がいま為さねばならない肝腎要の事、すなわち復讐を意味し、「時宜にかなったことを心得ている人」（*φρονοῦντι καίρια*）がオレステスその人に望みをかけて言われていることは明らかだろう。彼女はその人から「適切な言葉」——具体的な復讐の日時や手筈の詳細を聞きたいのであり、また自分の嘆きをその人に聞いてもらいたい、非難や愚痴に同調してもらいたいのである。そして、彼女のこの願いをかなえてくれる者は、同時に彼女に仇敵による束縛・抑圧からの解放と自由な発言の機会を与えることができる。こうしてエレクトラの〈*καιρός*〉は、自由に物を言うことが可能となる〈刻〉というさらに重要な意味を含むのである。しかし、彼女はその〈刻〉が目前に近づいていることにはまだ気づかず、ただ復讐女神^{エリニース}たちに弟の帰還を祈る（110-20）ばかりである。

エレクトラがしばしば声を大にして訴えるアイギストスやクリュタイムネストラ

の不正とは、アガメムノンを殺したこと以外にも、二人が同衾し（272-3）、アガメムノンの命日に宴会を催して彼の名誉を汚し（277-84）、家財を蹂躪し（267-71）、また終始反抗的な態度をとり続けるエレクトラを虐待し召使い同然に扱っていること（263-5, 1192）、さらには子を成して刃向かうことの無いように結婚させてもらえないこと（165, 185-8）などであるが、我々がいま見たように、これらの不正を表立って自由に非難することのできないこともまた、正義に反する不当なこととして彼女に憤懣やるかたない思いを抱かせている。そしてこのような自由な発言の封殺は、エレクトラの境遇に同情を寄せる女性市民たち（＝合唱隊）ばかりでなく、第一エペイソディオンから登場する妹クリュソテミスによっても何度となく繰り返されている。

現実には妥協して生き、仇敵として憎むべき相手から相応の生活を保障されている妹は、「今のこの逆境のさ中では、船が帆をたたんで進むようにすべき」（335）だと姉に自重を求め、さらに「国はずれの穴蔵のような牢獄」（381）に送られないように「今が分別を働かせる潮時だ」（*νῦν γὰρ ἐν καλῷ φρονεῖν*）（384）と嘆くのをやめるように忠告し、「分別を身につけてさえいたら」（*εἰ σύ γ' εὖ φρονεῖν ἤπίστας*）（394）自分と同様に素晴らしい暮らしができたのに、と姉の境遇を思いやる。また第二エペイソディオンで、オレステスの（偽りの）死の知らせを受け取り、弟を頼みにできないならば姉妹二人で復讐を实行しようと誘う姉に「分別を持ち合わせていたら」（*εἰ φρενῶν*）十分用心して自制したでしょうに（992-3）、とその無鉄砲さをたしなめて思慮分別を弁えるように諭すのである。クリュソテミスの「分別」（*φρονεῖν*）という現実¹に即して生きる処世術²に対して、エレクトラは猛然と反発し、妹の「自分が何程か分別があると思うなら、そんな分別をお持ちでいるがいい」（*ἀλλ' εἰ σεαυτῇ τυγχάνεις δοκοῦσά τι φρονεῖν, φρόνει τοιαῦτ'*）（1055-56）という捨て台詞で姉妹は決別し、第二エペイソディオンの幕が降りる。それも、エレクトラが、時宜³にかなったことを心得ている人（＝肝腎要なことを分別している人）（*φρονοῦντι καίρια*）に希望を託し、自身もまた「思慮分別を弁える者」（*σώφρων*）（365）として父の仇敵を討つことを正義と信じて譲らないからである。したがって、クリュソテミスの「分別」（*φρονεῖν*）という表層的な処世の方途のもとに言動を規制されてきたエレクトラにとって、オレステスとの再会は、これまで鬱積してきた思いが一気に噴出する契機となるのである。

こうして第三エペイソディオン、舞台はオレステスとエレクトラが再会する場面を迎える。先に戦車競技中の事故で死亡したと偽りの報告を守役に届けさせたオレステスは、自身で骨壺を持って姉の前に現れる。弟の死はやはり事実であったか、と嘆き悲しむエレクトラ。その姿を見て嘘をつき通せなくなったオレステスは、自

分の正体を明かし、彼女は歓喜の絶頂へと至る。弟を腕に抱き嬉し涙にくれるエレクトラは、これまでの不幸を次々と彼に訴えるが、奇襲をかけるつもりのおレステスは館内の者に気づかれはしないかと慌てて姉をなだめ、沈黙を求めて次のように語る。

Or. それも十分に分かっています。でも心おきなく話せるようになったら、その時こそそうした悪業のことを思い出すのがよいでしょう。

El. いつでも私には、
いかなる時でも正当に、
このことを語るができるはずです。
ようやく今、私は物言う自由を得たのだから。

Or. 私もまたそう思います。ですからあなたはその自由を大切にしてください。

El. どうすればいいの。

Or. その刻が来ぬ^{カイロス}うちは、長々と喋りたがってはいけないということです。
(1251-59)

「正当に」(δίκᾳ) 言葉を語る〈刻〉が来た、「ようやく今、自由な口を得たのだから」(μόλις γὰρ ἔσχον νῦν ἐλεύθερον στόμα.)、と浮かれ騒ぐエレクトラに、本当の復讐の時機が迫っていることをそれとなくほのめかすおレステスは、それでも口を閉じない姉に向かって忠告を繰り返す。

Or. 余計なお喋りはおやめください。
もう私に教える必要はありません、
母上がどれほど非道だとか、アイギストスが館にある父上の財産を
どれほど無駄に浪費し、贅沢の限りを尽くしているかなどを。
なぜなら長話は時間の好機^{カイロス}を逸してしまうからです。(1288-92)

長話に興じて愚図愚図しては仇敵に察知されてしまう、好機を逃すなというのである。また、近くで二人のやりとりを聞いていた守役も、姉弟が「今こそまさしく最大の危険のすぐ瀬戸際どころか、まさにその真只中にいる」(1329-30) のに無分別にもそのことに気づいていない、と叱り「復讐の刻」の到来を再度告げる。

Pa. もうそれで十分でしょう。エレクトラ様、

幾多の夜と昼とが経巡って、あの時からこれまでの
物語の一部始終をあなたに明かしてくれることでしょう。
今こそ仕事を為すべき刻であること、
そこにおいでのお二人に申し上げます。(1364-68)

かくして、「時宜にかなったことを心得ている人」(*φρονοῦντι καίρια*)の口から「復讐の刻」を初めて知らされたエレクトラは、仇敵討ちの成就をアポロンに祈願して(1376-83)第三エペイソディオンの終幕となる。あとはオレステスらの指示する〈*καιρός*〉において、姉弟が一致協力してクリュタイムネストラとアイギストスを討ち果たすだけである。

結びとして

最後に当初の課題に立ち返って、エレクトラの台詞(1415-16)の意味について整理しておきたい。

外出中のアイギストスを館の外で見張るエレクトラの耳に、館の中から「ああ我が子、我が子よ、この母を憐れと思ってちょうだい」(1410-11)と、襲撃したオレステスに哀願するクリュタイムネストラの声が聞こえてくる。これに答えて「あなたからは、その子もその子の父親も憐れみをかけてもらえなかった」(1411-12)と罵るのはオレステスではなく、館の戸口に立つエレクトラである。そしてこの後に続く懸案の台詞——「刺すのです、できることならなお一突き」「アイギストスと一緒にならば良かったのに」(1415-16)——も母親と娘の割台詞となっていて、母に迫って剣を突き立てるオレステスの存在は完全に消されている。ソボクレスは、殺害の行為それ自体をオレステスに担わせる一方、これまでに溜まった憎しみはエレクトラの言葉として彼女に委ねたわけである。おそらく、エレクトラを演じる俳優は「なおひと突き」と語りながら、実際に剣で母親を突き刺す真似をして見せたであろう。そしてこのとき観客が、舞台上には現れないオレステスの姿を舞台上のエレクトラに重ねて見るであろうことは、我々にも容易に想像できる。いわば剣でオレステスが殺し、言葉でエレクトラが殺すのである。この意味で母親殺しは、姉弟両者が一体になって実行されると考えてよいように思われる。

以上に考察してきたように、エレクトラが度々口に出してきた「^{ロゴス}言葉」、すなわち仇敵への憎悪と復讐への溢れる思いが、オレステスの「^{エルガ}仕事」という言葉で象徴される母親殺害の実行行為と一体化したとき、復讐は現実のものとなる。したがって『エレクトラ』エクソドスの復讐の場面、とりわけ我々が本論で問題としてきた

箇所 (1415-16) は、オレステスの「仕事」とエレクトラの「言葉」とが実際に合体一致する〈刻^{カイロス}〉として設けられ、この悲劇の核を成す部分であることはここに明らかであろう。ソポクレスの悲劇『エレクトラ』は、脇目もふらずその〈刻〉へと一直線に邁進するオレステスが描き出す軌跡と、それに螺旋状に絡みながら最後に同期一致するエレクトラの描く軌跡とで織りなされているのである。

注

- (1) 『エレクトラ』の解釈に際しては A. C. Person, *Sophocles Fabulae*, Oxford 1924 (OCT) をテキストとして使用し、C. Kärnerbeek, *The Plays of Sophocles, Commentaries, Part V : The Electra*, Leiden 1974, の注釈を参考とした。また訳文は大芝芳弘訳「エーレクトラー」『ギリシャ悲劇全集 4』岩波書店 (1990) をもとに一部を本論の内容に合わせて改変して使用させていただいた。
- (2) エウリピデス『エレクトラ』971, 973, 979, 981
- (3) エウリピデス『エレクトラ』1230-31
- (4) 大芝訳前掲書「エーレクトラー」解説 pp. 432-435
- (5) ἀκμή はもともと事物、あるいは事態の「頂点」や「絶頂」を意味する語であり、その意味では「時間」(χρόνος) の頂点である *καιρός* と内実は重なる。このため本論では「潮時」と訳し *καιρός* とほぼ同義の用語として扱っている。
- (6) 『オイディプス王』における *καιρός* 問題については、拙論「オイディプスと *καιρός* ——ソポクレス悲劇の根柢にあるもの——」『文学研究論集』(筑波大学比較・理論文学会) 14 (1997) pp. 9-27 を参照されたい。
- (7) オレステスの語る〈ἀνδράσιν μέγιστος ἔργου παντός ἐστ' ἐπιστάτης〉は、ヘシオドス (*Er.* 694)、ピンダロス (*Ol.* 13. 47-8)、テオグニス (401-2) らによる当時人口によく膾炙した箴言のパラフレーズであり、また前作『オイディプス王』にも「万事は然るべき刻において良し」〈πάντα γὰρ καιρῶ καλὰ〉(1516) という同様の表現が見られる。しかし本論でも述べたように『エレクトラ』における *καιρός* はそれ以前の用例に比べて倫理的色彩は薄く、この傾向は次作の『ピロクテス』における「好機は万事についての判断を握っているが故に、一瞬のうちに多大な戦果を上げる」〈καιρός τοι πάντων γνώμαν ἰσχων πολὺν παρὰ πόδα κράτος ἄρννται〉(837-8) という箴言についても指摘できる。

(8) 『エレクトラ』で使用された〈καιρός〉とその類縁語の全用例を以下に示す。

- [κ. A 部分] Prorogos 22 Pa. (οὐκέτ' ὀκνεῖν καιρός, ἀλλ', ἔργων ἀκμή)
 31 Or. (εἰ μὴ τι καιροῦ τυγχάνω)
 39 Or. (ὅταν σε καιρὸς εἰσάγῃ)
 75 Or. (καιρὸς γάρ, ὅσπερ ἀνδράσιν μέγιστος
 ἔργου παντός ἐστ' ἐπιστάτης)
 ※ (110-120) El. による復讐女神への祈り：「オレステスの帰
 還」
- [中間部] Parodos 228 El. (φρονοῦντι καίρια)
- [κ. B 部分] 3 Ep. 1259 Or. (οὐ μὴ' στί καιρὸς, μὴ μακρὰν βούλου
 λέγειν)
 1292 Or. (χρόνον γὰρ ἄν σοι καιρὸν ἐξείργοι λόγος)
 (1338) Pa. (ἀπηλλάχθαι δ' ἀκμή)
 1368 Pa. (νῦν καιρὸς ἔρδειν)
 ※ (1376-83) El. によるアポロンへの祈り：「復讐の成就」

この一覧にも明らかなように、パロドスにおけるエレクトラの発言を中心として

[κ. A 部分] と [κ. B 部分] とがきわめて対称的に配置されていることが分かる。